

朝鮮物語

中卷

リ 5
1568
2



伊弉門
1568
卷之



朝鮮物語卷之中

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

十月十日^{トウチウキョウ}上將軍秀詮^{ウヂノシラ}公より黒母衣^{クノボロ}の^カ使番^{シバ}太田小十郎^{オウダコウジロウ}を^シ命^{メイ}ず
蔚山^{ウリサン}太田^{オウダ}飛弾^{トビダン}も^シ本陣^{ホンジン}下^シされ上意^{ウヂノコト}の^カ趣^ソハ此度^{ココロ}奥國^{ウチクニ}中^{ナカ}の^カ働^{ハタカ}手^テ
飛驒^{トビ}守^{ノリ}主^ノ計^{ハカリ}頭^{カビ}數^{カズ}人^{ヒト}ノ^カ拔^{ヒキ}出^{ダシ}忠^{チウ}節^{セツ}の^カ隱^{カクレ}舉^{アゲ}て^シ計^{ハカリ}さ^スる^{コト}を^シ君^{キミ}臣^シの^カ義^ギを^シ
重^{オモシ}ト^シ其^{ソノ}身^ミ武^ブ命^{メイ}を^シ輕^カむ^{コト}を^シ故^{コト}あり^シあ^ハ人^{ヒト}備^ヒふ^{コト}付^ケき^テ澤^{ワタ}本^{ホン}十^{ジュウ}郎^{ロウ}
兵^{ヘイ}傍^{ボウ}尉^ヱ瀧^{タニ}公^{キミ}友^{トモ}樹^キ耐^ナ口^{クチ}上^ノを^シ以^モて^シ聞^キ不^フの^カ次^{ツギ}弟^ニ近^{チカ}日^ヒ言^{イハ}上^ノ及^キ一^{ヒト}此^{ココ}
為^{ナリ}秀^{ヒデ}詮^{セン}渡^{ワタ}海^{ウミ}と^シい^フと^シ名^ナ釜^{カマ}山^{ヤマ}海^{ウミ}の^カ城^{シロ}主^{ヌシ}小^コ仰^{オウ}分^{ブン}ら^シま^シ一^{ヒト}一^{ヒト}依^ヨて^シ
國^{クニ}中^{ナカ}見^ミ物^{モノ}を^シ事^{コト}能^スハ^シ深^{コソ}き^{コト}世^ヨ承^シ奉^{ホウ}を^シ遠^{トウ}海^{ウミ}を^シバ^シけ^テる^{コト}渡^{ワタ}海^{ウミ}

朝鮮物語 卷之中

依田氏藏

佐あーせえて東西の先手小新地の先出を云付一其邊然る
處き地形を見立年内余日あつ寒天なりといひども追付出来
せふ粘小申付き音仰下りるる飛彈もぬり滅小以難有は説
ふこい先手の城仰付る趣畏り奉る由詰申上り七月舟
合戦言上せー日本よりの山返事南原落城言上の山返事小十郎
今日持参せり飛彈も封と開洋見を公評感激くび一舟軍
左馬介又十所一番秋月三郎高橋九郎毛利き波ち二番と定下
さる南原先乗五人の者共小山寝美として判金二十枚少羽
織と添く下は大河内茂左衛門尉一人中判金二十枚少羽の
内羽織と成下さる各面自身不除たり

飛驒主計段蔚山の地形を見立急の普請るれ吉日を撰小
乃も十二日繩張敷印を淡野左京大夫中納言輝元が先手完戸備
前守安國寺小下場と渡一各二萬三千餘人の人数を以て風雨を
厭ふもこれ昔飛驒も不知り飛驒主計段人教を以て蔚山城廻
里小大柵三重付魚一四方槽と上り一吉清正小向て山邊の居城
人少く如何あり其上長陣の苦勞も軍兵を台連帰城有て
休息せしとより主計段收めて一吉守護の為加藤与在軍
尉同清多衛尉近藤四郎右衛門尉小狭炮三百挺付置西生海下渡
里より秀詮云作として西の山先手順天の城十八日より鉄初あり瑞
信濃寺澤志摩も松浦肥前も合て二万三千七百人の人数を以

見和泉守熊谷内務先を以奉命として五兵衛東の山先を蔚山の城と其間海路二百七十三里あり

飛驒守枝木を代て左京大夫幸長小合力せんとて二千餘人の人夫よ軍兵二十八騎を奉命として旗士本は各銃炮三百差添え毎思入ふ々宗清正幸長完戸備前守安國寺も人夫も付焼て蔚山切小入山を十月廿四日蔚山の乾小當も大少の盛一と二十八騎の走夫を連江川を流し義川原小乗上り如小弓手の山の頂小人二人立て考を揚々呼何事ぞや向々も我軍は計は家成今朝より鶴白を移しひ小出は存存の外も大敵出乗り革命を賜りて遠く此山の逆登りぬ各の旗先を見り乾の大山小引龍るあ

の山中よ敵必定居し其覚悟有りと教由二十八騎の其中小如何せん評定しる者多し又其中小能大敵引入りたりとも枝木切らて有べきりとて彼山一分入望小叶枝木思の傳小伝出先松陣所遣一張者の軍士も麓下りし如小敵三千余山中より付出大山の中半を備を立く岡のまると上目の下に現て雨霰の降れく射掛打く不麓を南少五六町東西三百余丁計の麓原るる味方の小勢枯野の茅の中を居居るふが此若系伐乗出ハ二三丁内にて討つる大敵も合戦も強ひ及びし一免やせん角やせんと寒天も汗を流しかめ内小張番二十八騎の内福地加藤村山崎若系等尉未士一人二人の奴系を討死し極め一生の樂も果

多る見切て棄てし散る逃ゆ寔山一騎と千餘下と願ふ
 色なき小言りけ共跡をさる退りり至斯り多ふ
 の谷ふ多く聲聞ゆ大河内号とて定て味方の人夫多し捨殺
 小をくきし此引おさんと云て乗入るを傍輩林角を尉川
 村十助制して日法を言と云て此を乱し一山追ハ妙如と下知
 一給ハ是ハ條の小事と云て我等二人似合たりと云捨て敵渡
 と備ふる下の谷合ハ山をまを乗入建案のどく清分先を林
 隼人佐人夫多し一かあ人号と出さるり角て二十五騎の軍
 士を握るを握る免角暮を待て引懸くと云もあり河村
 林大河内近藤甚を尉等と云るハ其内加勢来て引懸死する

そのを海いさるる如く加勢の者共後日の高言と聞生る甲斐
 る如くさきとひぐ果るる大河内枯る置をうまふり
 口茶をうりして火繩の火を付く落しけき人長を越る枯
 蘆藪く燃上るを幸と下知して日諸人駈廻て火を放てと云ん
 多ハ騎るも歩卒も諸と云に飛翔て火を付るおも南風
 頻小吹て以外小焼立炎敵小吹けハ敵さまりはを備と
 少ハ山の上一川と味方五十騎出共苦糸を出て軍の法迎候と云
 纜ある聲きして勝岡を岫とあも心静小引たり山小
 打合矢叫鉄炮の音海越小蔚山一團けき清正の軍士山田勝
 右橋尉只一騎鞍至鎧け合せると幸小障泥も指江川

ちりて一敷小地東の端より追々に矢を負て弓を志すもあてず
 け小弦ある然共大河内が下細せし猛火小敵合の楯をかき
 死を遁てゆる虎の尾を踏で龍の鬣を撻るんも角やとぞ
 覺て一死弾も加勢を言付らるしや引れゆりけは早らる
 出し事の松子と聞え枯野小火をうろ敵の楯小成と云事
 日本小於て其方便を言付誰れ此武略を志すやととり各軍
 士同音小今日前後の傷大河内林川村近藤五と申は林
 川村近藤各の心もあはれはるも曾て某とも存知らる事
 小いむ正林が人ぬも大河内を使と致し若原放火も偏小大
 河内が下細小ちを従てんと申りねは一吉小感トむひ言葉仕

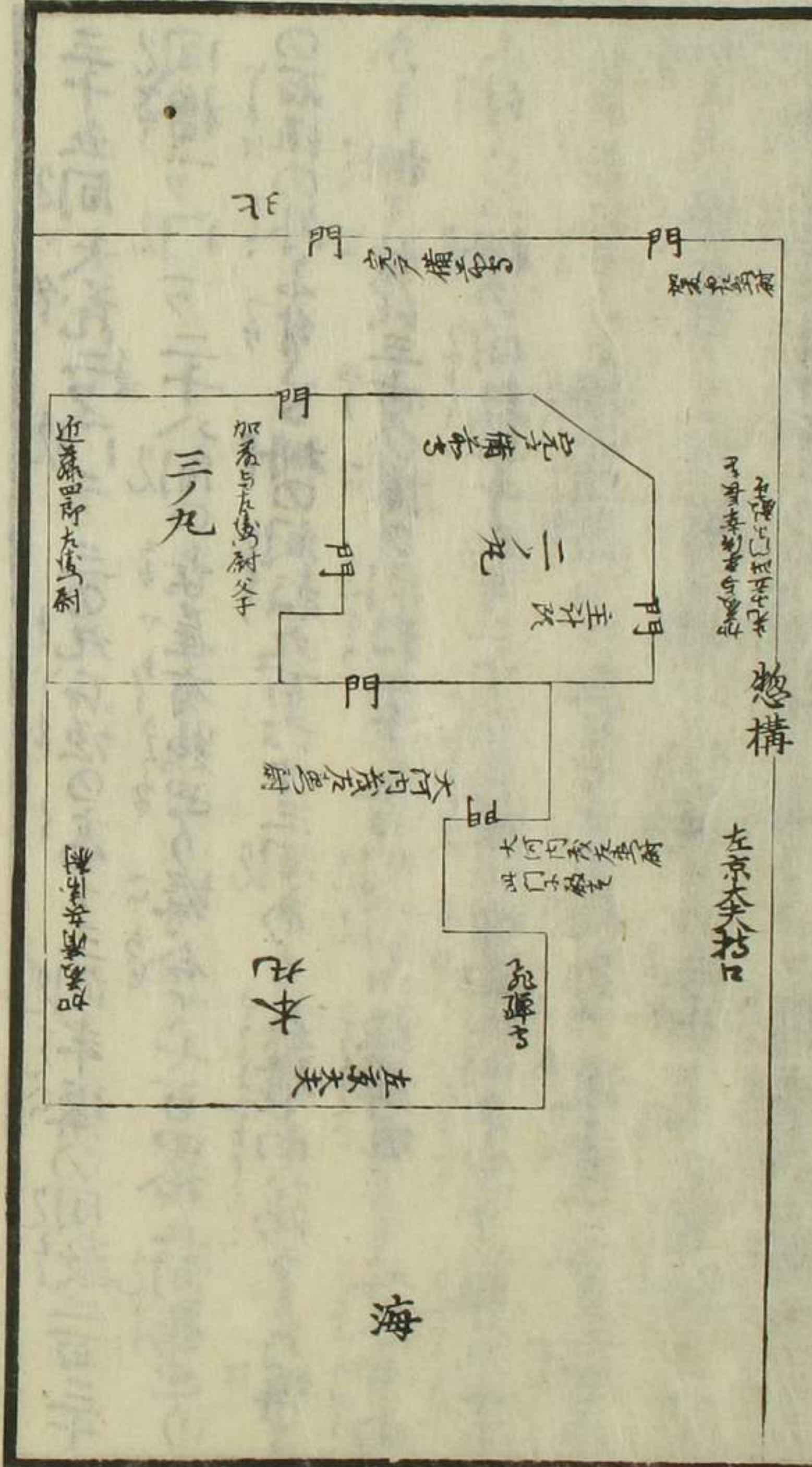
合と作は皮面は僅有板小の口上勝云んも愚らり今の仕合小
 人ま二人も失せ加勢の力を得ば手柄の底今小限らる事
 満是是小過りの矢とそ褒美として金銀二本を賜りり
 叔明日より小入るるは薪の而馬舟を後のをゆき一其の
 取しき肯言付らる先松逃歸る福地小寺来二人の者共
 戸外五五切腹の使を言付り去とも何の咎もか其係小
 也と云り一人の名を言付然も小関山派の勤首座と云出家書物の
 里有て大河内と頼渡海を一吉の右筆通し叶はる事多り
 々色バ大河内一吉角と申は一吉小取で本陣へ呼置をしに
 通し明らり此勤首座一吉の仕置武道の差引を見て天晴小

名の大不学の大智者文武も道の名將哉とくハ十ヶ國の守護
 と成てふうううきくろりと譽り近習の士共夫ハ何と
 同首冠著て此及も手福の士小則賞を共らる事夫唐書小
 賢と録もる小財と不惜ゆと妻もる小時と不越と書り
 一吉慶の心此報小遠に第一慈悲者第二無欲るり第三道
 者第四若長の後義明るり第五武道の達者ふも諸道必政
 の貴將るりしと感トける蔚山の新城飛驒も急て未明る
 極晩ふて普清場をけるもさして下知有るハ十一月の末つ
 く津出素と本丸石垣の高サ八間堀の回数三百八十間二階門
 矢茂六ツ二十五間の長屋あり二丸石垣の高サ五間堀の回数百

三十五間矢茂二ツ門二ツ三の丸石垣の高サ三間半堀の回数二百二十
 間櫓二門二ツ二十八間の長屋有惣旦り堀合て七百四拾五間惣旦り
 の石垣の外付る柵の回数九百六十三間あり惣構南六浦るハ堀も
 あり柵も付る三方の堀の回数二千三百間門二惣構堀より外土居面
 小付る柵の回数二千五百二十間惣構の堀面三間半深サ二間半中
 堀の外に付る柵の回数二千九百七十二間あり近邊二二里の内小
 竹るれ故小惣旦りの堀下比ハ七尺四寸廻りの丸木もふも堅横もはて
 犬釘もふも裏面より打抜裏と返りり難堪大寒國成ふ依て
 大工を傳の者共寒ふあてらるとも豆の爪悉膿抜るゆハ城内家
 の仕事ハ延りき諸方門の扉を造く十二月三日より普清の人

是残らばあきて数日の苦勞とぞ休めらる

蔚山城之圖



廿三日南より破れ
 惣構
 三ノ丸
 二ノ丸
 本丸
 海

帝幼不終居る大明國のお王ナシニシテ日本勢を討れりては是を憂念
 と思ひ殊小朝鮮の大王と初とて大明の加勢ハ何の爲小事をとると上下
 の意に言のづゝ不乃の誅を恥明のお王八十万騎を引卒一蔚山表出
 張せり十二月中旬の頃大さるる板を削て今月廿二日必以其表出張一
 一戦小乃一各随分砲城の用をなせりて先子の安國寺の海
 のあみぞをとりりる士卒を嘗て潰潰され安國寺を見らる所小
 安國寺其責を知くおなまなり一れを以隠祖中の士も知るは
 己ハ痛事有とて軍兵を以完す不付さゆ一置小姓歩者少る

連密小拔出釜山海(退)げ不(は)り依(よ)りて人(ひと)も無(な)りけり
 十二月廿二日寅の刻(とき)の事(こと)とバ諸(しよ)人(ひと)一(いつ)炊(くわ)の夢(ゆめ)未(ま)覚(さ)る(ら)ん大明(たいめい)の大(だい)
 軍(ぐん)不(ふ)通(つう)小(せう)出(い)で左(さ)京(きやう)大(だい)夫(ふう)幸(きやう)長(ちやう)輝(き)元(げん)が先(ま)手(て)の大(だい)將(しやう)完(げん)戸(こ)備(び)希(き)ちが陣(ぢん)あ
 押(お)入(い)散(さん)切(き)り之(これ)を寝(ね)首(くび)とて陣(ぢん)屋(や)と扱(あ)り山(やま)合(あ)ひ引(ひ)き合(あ)ひ然(しか)るに
 小(せう)常(じやう)の地(ぢ)敵(てき)と心得(こころえ)て一(いつ)騎(き)もあ(あ)らざり付(つ)けしと云(い)ふ小(せう)飛(ひ)彈(だん)も京(きやう)
 大(だい)吏(し)完(げん)戸(こ)備(び)あ(あ)る加(か)後(ご)与(よ)大(だい)將(しやう)尉(じ)同(どう)与(よ)平(へい)治(ぢ)近(ぢん)藤(とう)四(し)郎(らう)大(だい)將(しやう)人(ひと)形(かた)を
 催(もよほ)し其(その)勢(せい)二(に)万(まん)三(さん)千(せん)餘(よ)人(ひと)敵(てき)の跡(あと)を追(お)つ十六(じゅうろく)七(しち)町(ちやう)乘(のり)出(い)で旗(はた)旗(はた)と備(び)
 金(きん)鼓(こ)を打(う)ち互(あひ)互(あひ)足(あし)輕(かろ)合(あ)ひの合(あ)ひ戦(せん)を敵(てき)の足(あし)煙(えん)大(だい)將(しやう)黒(くろ)色(いろ)黄(わう)色(いろ)の折(お)折(お)折(お)
 小(せう)下(げ)知(ち)りて幸(きやう)長(ちやう)完(げん)戸(こ)備(び)と取(と)り合(あ)ひ打(う)ち合(あ)ひ小(せう)味(あじ)方(かた)の足(あし)輕(かろ)追(お)ひ
 敵(てき)の足(あし)輕(かろ)一(いつ)引(ひ)ひて踏(ふ)み歩(あ)み頻(しばしば)小(せう)打(う)ち味(あじ)方(かた)引(ひ)敵(てき)付(つ)くお(お)ぬぬ

智(ち)く打(う)ち下(げ)知(ち)りて足(あし)輕(かろ)共(とも)少(すく)しも驕(あ)る氣(き)色(いろ)もま(ま)く小(せう)鷹(たか)の指(さし)
 麾(ひ)分(ぶん)が如(ごと)く也(や)引(ひ)き輕(かろ)き働(はたら)成(な)る飛(ひ)彈(だん)も清(せい)水(すい)川(がわ)の岸(き)小(せう)軍(ぐん)を立(た)其(その)を
 て先(ま)見(み)事(こと)あ(あ)る敵(てき)を軍(ぐん)兵(へい)の少(すく)人(ひと)數(かず)の指(さし)地(ぢ)敵(てき)小(せう)飛(ひ)彈(だん)に敵(てき)
 足(あし)輕(かろ)の松(まつ)大(だい)軍(ぐん)と見(み)たり流(なが)るある此(こゝ)山(やま)小(せう)下(げ)り何(なに)方(かた)を見(み)よと下(げ)知(ち)
 せし小(せう)軍(ぐん)監(げん)の使(つか)来(きた)よらざる内(うち)小(せう)八(は)十(じゅう)万(まん)騎(き)の軍(ぐん)勢(せい)あ(あ)る嶺(たね)より
 乘(のり)下(くだ)し馬(うま)ほろり黑(くろ)雲(うん)のどく雲(うん)珠(しゆ)卷(ま)き立(た)日本(にっぽん)の愛(あい)宕(だう)山(さん)程(ほど)
 此(こゝ)大(だい)山(さん)を以(もつ)て方(かた)ど(ど)うぞ打(う)ち裁(さい)り飛(ひ)驛(えき)も是(こゝ)見(み)て去(い)る大(だい)敵(てき)を
 至(いた)野(の)合(あ)ひの合(あ)ひ戦(せん)叶(な)はる幸(きやう)長(ちやう)完(げん)戸(こ)備(び)と具(ぐ)足(あし)一(いつ)城(じやう)を堅(か)固(こ)小(せう)持(ぢ)下(げ)りあ(あ)る
 川(がわ)を渡(わた)り其(その)地(ぢ)を具(ぐ)足(あし)一(いつ)下(げ)あ(あ)る川(がわ)瀬(せ)を踏(ふ)越(こ)けり明(めい)人(ひと)是(こゝ)と見(み)る大(だい)
 將(しやう)既(すで)に退(ひ)たりと見(み)ふより早(はや)く八(は)十(じゅう)万(まん)騎(き)我(われ)方(かた)とと者(もの)出(い)で一(いつ)國(くに)の聲(こゑ)

諸共小味方の備と七縦八横小駝乱を大軍の時乃幸駈く鐘
 鼓の響小耳もはる大地もゆるぎや味方一戦も及ぶとる
 ほころひたるまも四方八面敷く小破軍一君臣互小生死の仍場と
 知を定に谷深く峯高く阻巖石の切もあらず一面小駝ある大軍
 小殺所と今おそ思ひ知まるとり左京大夫軍勢八川の曲の深
 淵小馬人共小追めも半ハ溺る死にけり完戸備若も八百の者数
 多討を白鳥の馬駈敵方一奪と三村紀伊も等三人を引具一
 退る一吉ハ大河内茂左衛尉只一騎幸長小田前小三郎只一騎
 具一馬駈持一人道具持人馬死に付て引を引餘り小味方討
 死に大河内足を見てお大将小清と申るる小覚之味方多く討れ

小馬中を立ちまはると申るるお大将馬を返し馬駈を立望し是
 よりりて味方少一落延れお大将も又引を引小敵前後小充滿
 てお卒多く討り大河内又お大将小乞てる中を立捨も大水の如
 群り来る大敵大将と見え乗志りて指を引はめ射るとども
 主従僅小四海を乗け討をきとせ只一人の働もあらず
 大将の馬駈を返し小馬小放もる兵共少く必死を免とけり亦
 蔚山城をき所小堀口一間余りの井溝あり一吉幸長又溝を後小
 當りて乗居る馬中を見て幸長の軍兵小八神部兵他菅太郎
 助も堀田権兵衛尉杯十騎計一吉の軍兵小八近藤も又馬駈尉若間を
 所兵備尉長田五兵衛尉山崎若原門尉福地加右衛尉と討世

きて馳来近藤旗炮の上をぬら三尺五寸の筒と持て近付
 敵を打たる早大敵入とて大將の左右より取切んとて大河内一
 吉小向て往るに如小馬とまると小見之敵後とを切早と城
 内へ入有て塙裏の法下知とて爰て敵五騎十騎討其何社の
 事々益き又今朝凌野成完戸々小屋敷焼まは陣来敵を
 まは笑不受多るく小の問りとも小屋をもちて自焼仕る下
 と云れは吉碯と睨て高勢に己何の功有て長しやある河内河
 まを味方小非や已早く退き去河内とて愈る大河内重て曰
 剛も宜知をとおはけは眼小遮る程のこ小功不切をるあは
 の黄旗黒旗ハ何の味方よてりや往あくは命と路中小捨る系

危きとより早く此の城入るきて城續登きよ於て城中小火を
 あけ切腹を大將の山を意とてわらわらと荒らに申けは一吉理
 伏しては其首を末末小三とて大河内京北へ乗向て死後
 おく存ると云れは幸長先よとて直小城内乗入ぬ一吉も一岡
 余りの井溝を起せ業々なり大河内も法を起退ふ一吉の士岩間
 太神岳村長田五兵衛村を乗るる溝を起ゆ大河内乗向て敵を
 打棄返一蹴掛て死せよ川一乗下せとて力を派をきともる
 て進む馬より下とて云如小敵乗来て岩間分甲を流く人々
 鞍の糸輪より刀のひき打を以て忽首を打抜る長田馬より
 下まんとするまは運の極めの悲一は凌生遊りける真字下りけ

るを敵はや駈きて落しも討て討ちたり其内大河内五ヶ所は
四ヶ所矢を射立り九ヶ所の矢を清て引返引退んとしこれ程
元の軍士備後國の住人三村紀伊守只一騎乗て居てお討ふ所の
こひひものいふ者どももあつくと云大河内を頼るも残りも
急ぎ引く入ぬと初をばつと只二人殿して退るに大河内先
と蘆毛の馬に乗る大将と覺て紀敵横切て通る大河内乗け
切拂ふ敵其太刀を避るてひざをけるは源け田水の上るは三
村が前中乗傾きたる蹄はつと後ば屏風を倒さかくは横切ふ
倒しは三村則死りてお討りと理る敵の上り乗るは大河内
を止る某う太刀馬も人も書はば脚を討ふは非をそあを急ぎ

首とを給と云三村殿をば上りて首早く摺落し馬小打乗る
人恙なく殿してぞ引ひは角を城乗入大河内福地加藤尉小
向て一吉が河内と聞らば福地一人と答る大河内已早く乗るま
行場を知らるると言は不幸長の先を後を在善佐侍在る大河内向て
一吉公は鎌倉の日本町の焼跡を造小討とさせ給ふとぞとる大
河内聞も敢て河内左衛佐已三國一の腰拔は飛弾を八津奉りしは
非ぞやいふ所の討死もぞと見捨て命助りけるはや飛弾を討死は
定お終ては大夫殿一羽首を刻んと急りるは田中小左衛尉討其
外二人乗り田中園く大河内と云又左衛佐と悪口はさば飛驒の
骨を拾へと四津源と共に乗出はるは小飛驒も馬を切きて歩

後衛門尉一騎小屋場を以て乗出を見ても田中少左衛門尉
 川村十惣林角右衛門尉は河内と向大河内を陣屋末敵を
 焼されば自焼せんと主君も申さる切あり主命よめされど傍
 輩も傳ぐる事も非ぞ我一人以て奉陣下陣焼拂べき為あり
 と云けり田中を初て各屯として我者らと乗出己の刻の終
 よりを陣下を夜中亥の刻よまで篝を焚小屋場を圍ふ
 持居り然も加藤主計頭清正の討せり二百五十餘町を隔て西生
 海小在城せしが左衛門大吏完戸が兵過半討死し飛驒を初て法
 味の知小大明人数八十萬騎を以て蔚山を圍ふを聞かば
 清正黒糸威の鎧を著ふ一内曹の緒を縮て小姓十人使番の

士五人持同二十挺歩行者三十人を連て及の小舟に乗て
 舟の表に押し標し標で押寄るが清正大音を揚て今此時ふ
 至て水夫少もろろ忽海を切沈む若時刻遅くして
 敵小船を五切し城中へ奉りしに於て船中の水夫を以て
 悉く切捨腹十字に標切し城中上下の目を驚し海中へ飛入
 て則龍神と願ふ空を飛行し鉄火石を降して大敵を靡き一
 と急り進んで長刀を杖に突て歩の板を踏鳴し艦船を翔
 立るは多門天の如く大軍の篝火を以て波上を照し沖は白晝
 の如くあまは舟は一矢を射し既成の刻計に蔚山を乗入
 るは熱構持堅ある時節よて望のまき城中へ入る清正一吉

小對面一斜うへに收て云々の此城にて貴老一所小貴と並むハ
 後日某が屍の有松分別不能ざる小角冥利も討つものハと勇
 むる元來此城の主計段々居城とするもきとの事あるハ除而
 のみ見て止ぬるおまゝあり候共大敵の攻と受今明日滅亡ハ
 べき蔚山一真盡小乗入る志一天晴大剛の猛將を感とる角
 て三大將塚裏を回り諸方の守を下知一敵陣と巡見一々々
 清正使番の箕部金ちま小向て死陣夜の陣小篝火の有級入
 込るると同箕部畏くあれ飛騨松山内尻小屋を待望の居
 らまひ申清正飛州小向て如何なる計也敵推きて討らん
 かね城内以外の弱りある一詮なき事と申付く事あり

一古谷て日本國中の神罰と誓て某ち付く小水も己く
 存せえする夏五夜も三度も某がト細を破て曾て聞けりもの
 三人も五人も定く其奴系が仕業成一一と有けは清正も打
 相貴老ちね松の人と三人五人持給へる法浦山友人持小名
 の大名小て山庄ま其が家小予が申條宵く程の者も人々
 持るに貴遠爰彼よて諸人小もぬけ給へる事實小理りりと
 感とめ向小壺を夫汝仍向て早引立き由申渡一同道ま
 一とゆり箕部畏く足輕三百台連來て手柄の詔と感と清正
 の口上細くと云渡を田中九津見大河内林川村等若て三大將の
 小箕部持給へると云箕部程の敗軍に硯も筆も有ハ未持

其上此時折紙まで有る爰と云ふ各咄といふ其流石の人ある法を失給ふや仮初の舟橋の押の番島や堤の石出の番遠見篝の番亦所中より品めり大將の墨付見せしめて引入るる武士の法あるまゝ今己の刻より今に至る僅の少勢一生の樂もあつる大敵の中に万死の才と成て陣を拵る詮もあつ大將の判形も見せしめて引取登ふや覺悟ふ及ぬ事ありと教へ云ふぬ其部は死して志き棄ゆ其部を三將よ言上は則其部等よ今日の手柄は頼るに申又言を改まけて三大將連署の状其部又持参以軍士は成見て去ばけし小屋を自焼して引入るる是種を引纏ひ其部夜先板

城へ入ると云ふ其部各同道申と清正中分傳を一同入る又此小屋火を掛し小勢を見切て敵推寄に難儀する各の山路其部任給と各各困て愚ふ不測に今まは是も苦勞極しは小屋自焼せん為をわ今此時の敵は是種業もあまし難く早く又給し若も路中踏止て加勢立ふと一は其部とあ引返し敵陣へ入付死まで其分遣ふ合點と云ふ其部聞て各の口上尤と申難しといふも大事の取入時刻移ては危くはた有る其部取入として是種を引中しひひり相各小屋を不自焼しけまは白昼小異あつ敵をを見て石火矢大筒を打ち大弓を射りたるは雨乃如し去とも軍士も驢を籠の陸首を

振りて是と乱れ行ひて敵五六十回と三町付引之真志小
 見ゆる味方急ぎ取入を見り同と暮暮りけり後先を敵小向て
 二十回けり後さき小籠さ城ぞ又さ斯りけるよ小三村紀伊も大河内
 及よ来て今朝相討の首三方一披露と云大河内答て其と今と云
 披露と云や聊心相討よは後早と云持糸得と云と云三村菟角
 小供申一と云相討よ非さふと云分さき為大河内も出けふ小
 三村首を持出して三大將の首小伺公一と毛利中納言が家臣三村
 紀伊と申のよ今朝大敗軍の制大河内をな馬尉と某と只二
 人殿仕り則ち首兩名さ大河内と相討よと申三將驚て相今朝の仕
 合小殿の上の高名と云事比類なき子柄無言語小述わ付

死せしめて我々も者共と云え今日の上ふ無比き眼きと思ひ
 一に如此の大勇者のさ高名勝る人も愚ると以の外無き
 大河内申さ其切掛矢刀馬も人も當りひひ新お討よ
 小紀伊も後一人の高名と申三村重て云及大河内が矢刀馬小
 當りひひ依て某も前て倒れを相討と言葉をばひひるるをひ
 人ふに矢刀當り去大河内が矢刀風をひくお其も前て落さな
 と其争り討取らんや菟角相討小仰付く是得と云大河内強
 お討小能と云切清正是と関く相も聞まふ事や或は奪首を心
 掛又お討よも無物を相討よ仕る世の中三村お討と云とも
 大河内合然さ古今せ奴の次第感さふ堪り主計が者共東

とて呼ぶて能士の言葉と聞て明日死すの後学小せよと云り
一吉白く小紀州大河内を分小任せし由色一人の高名然るべしと
云清正幸長と極り色三村多と突て相討の行河内付は大
河内有力影の高名と某一人小仰付る事厚き中の露之
由糸を結立押付も和しくして立てり城内の上下舌をまきて
又類もふき剛まを河内来の涼しさと感せねおる有り清正
大河内を逃付て山道若年ありと云ども比類なき一言お討百倍
まはりありと云々色より大河内も産をまき没所けりけき三
将を初て河内面々大河内三村を津論八渡を催し事共あり
正安晋の六卿を目小見有難さよと重感友とや角て三

村大河内を待居て云々色より大河内も産をまき没所けりけき三
山蔭と存一代の曾後世の聴けり色小美ん山蔭の為小是くはて
い今朝討残され味方僅小五千小足げ小刺兵糧入を水
角大敵の攻を防と事傳使妙目小端郷が芥をんで龍車と止む
とも此堀裏ハ叶難一あは貴田と小不肖と云ふ由の山路の山供
申度合頼うりと云々色より大河内も産をまき没所けりけき三
そ謀もるる色殊小飛驒守を没所第一敵付く攻めき悪小
まは某ども死出の先陣もる一今生の西行を今以限りと云捨て
互の小ま小涙をせし西の役もり別を今今日敗軍小味方
討死の着到るるに一万八千三百六十餘人より討つて軍兵も矢

五本十本十本射立しぬ無りけし其餘各及ぶ所の堀裏小
鎗の槍首を握り敵の責を待たりける

去程小十二月廿三日卯の刻けりあるに大明の為王の本陣小息の貝
と立しるの早鐘突鳴り音は度て我千番共限りるに石火矢大筒

蔚山の城小差向て打るふ其響城中大地震の如く八十名騎の勢
軍一及小間と上りけし龍兵舟もはふ身骨も忽ち碎る

心地して天地も崩れ太山も金輪際沈汁小雲より熱構の西北
東三方一勢大敵一守と武者より備の色と見え先陣後陣の間

を隔し二十と云限もく立候ける多一守の大將小知りけしと
早雲震のどく群と来て楯を雌羽小突雲攻むる城内より

透回あく打立射立しぬ敵楯を一度小抛捨斧鉞太刀を以て
立り二重の柵と成切破り忽堀を付りけり城内の軍士矢おろし
拳て差を中道と防ふとて大明勢形儀正命小構は攻むる
ハ討共突も物の敷もせし棄誠剣誠進は堀をばると切破
し堀裏の軍兵もあまて二三本丸も堀邊の商人雜兵も
我先と逃入り向大子の口で七十五人馬三死二死門で二十四人馬
三死三の丸の口で三十四人馬四死跡が上小増敷して城を又々去加原
与平治殿を公掛諸人の説かれ入る父と馬射持只八使と以物
搦破ま早く堀入りくと云ふ一我ハ本小た京大幸長の持
足乗りて幸長と先立り受けし幸長の了終持無類する兵小

て只一人引けりて入るる敵合近きバ討下と馳來る平治
 その馬馳よ輪と掛く終ふ討せざるあし殿二九搦手の口
 入るる爰小大河内なる門射々昨日の敗軍小馬四所まで討れ
 けし馬と城内置ふ敵歩立中引ける間忽然と諸勢の露
 ふらりて近寄敵と切拂て本丸大手の門ほど入けり三大將
 さるり堀裏の役所と定む本丸東側大手の門左右の矢死す死
 弾も一吉南側矢死す三つた系夫幸長西側矢死す一ツ二十五回の
 長屋二の丸下りの口までか孫清兵衛尉二丸主計清完
 戸橋ある二丸か孫ある連尉同与平治近藤四郎を連尉と極めて
 各堀裏とぞ堅めける敵の大軍夥多一も返て入る退き一も返て

ハ引荒子を入るる辰の刻計より夕日及びまで六夜中して
 攻めりたる龍兵代不味方家一息もはなげ火烟を出して防る
 堀城内の通を断切陸子の押として十萬騎舟子の押
 十萬騎を塞ぎまじ誠小島あつて八城中小入を御はせりけり
 小龍兵寄集り評定しるハ抑今日の大攻小敵少ハ草臥え
 南大敵小五十重百重の限もろく圍を居て命を惜む事あ
 トいざな今夕夜討小出んと云合せ田中小を連尉二の丸小行清
 正不向て唯今我打小罷出若か丸小又難き時多も候ハ二丸
 三の丸成共取入る一合言葉ハ是れみて法門の南小御付ら
 是れと云渡一僅五十騎計密小城を思出て取討せ討

其陣行儀正しく其討もあつた我といども脇の陣より加勢せぬ鎗先を夜討の方へ差向て一足も去らば備を乱さばまきりし空居る間銃兵望のまに打まきり首討を鎗先刀のけりを高名と一味方人も討まきり引ひきり敵夜討のまきり立有りとて城内の軍兵夜の間を合は堀裏をぞ守りける
 廿四日寅の二天より大軍は陣中催ひ渡り候とまきり敵方より日本人と見しる士一傍城山の麓小き大音上りてまきり城内鳴と静て儘小き小地少勢の蔚山時刻を移しを只今眼赤し乗破く大将を先とて籠兵悉く生捕大明國の禁中を見物させんと呼つり城中小星を聞答て曰夫軍の勝負と

云々多し少しより八十騎ハ數るる五百騎が敵より共山を越せぬ討じり兩國王を生捕て我朝帰國の土産と一日本大君實檢小備奉らんはあつりと返答を角く大軍一準備を三方をむ巻持楯と一と一鉄炮を打矢を射込大晴雨の塊を破小異るる大河内茂徳尉堀の上小登て引志をり射る敵城より射る矢まで大河内が願を射さるり恩の緒を射切てれば曹へ下落けるを折帝幸長通り見てまを負給りやと問をる左徑の車ふらびとま内ふ又矢来て右の臈子を射立々大河内三所矢病を蒙り早矢種もあけま堀の上より下しり我は太軍の地を搦管弦して備の勢を立合まると等く太廿二足除りの大竹と十

文字不_レ打_レ遠_レ麻繩の太きを以て家根裏の如くつき付るかと教を
 与て持束照_レ下_レの_レ白堂_レ大勢足をかつきは_レ物石垣_レ只一
 度_レ打_レけ我者_レを_レ攻_レ登_レる魔王修羅の我も夜叉羅刹の念_レ是_レ不
 過_レ下_レと_レ見_レる城内の軍士も付_レ系_レ塙_レ一重を隔て突_レ落_レ刻_レ序
 胸の板_レ骨のはち當_レる所を幸_レ不_レ火_レ水_レ不_レ成_レて突_レ崩_レを辰_レ刻_レの初_レより
 申_レの刻_レの終_レまで七_レ備_レ七_レ不_レ替_レて攻_レあり_レる敵_レの物具_レ不_レ當_レる_レ先_レ
 り突_レ出_レを火_レ縮_レ毒_レの如く_レなり_レ滅_レ不堪_レ難_レき寒_レ國_レなり_レとい_レど_レ去_レ敷_レ
 刻_レ防_レ戦_レの勢_レ不_レ可_レの_レ内_レ具_レ是_レの_レ下_レより_レ流_レ汗_レ刃_レの_レ緒_レ草_レ摺_レ下_レて
 ハ_レ水_レ柱_レと_レ成_レ号_レを_レ以_レて_レ口_レ舌_レの_レ乾_レを_レ止_レ履_レと_レ手_レ透_レを_レ得_レを_レ敵_レ門_レ外_レ
 ひ_レと_レ攻_レ者_レ扉_レを_レ打_レ破_レんと_レ欲_レを_レ龍_レ兵_レ指_レ付_レて_レ討_レ立_レ討_レ救_レは_レと

い_レども_レ少_レく_レも_レ疾_レま_レん_レ其_レ死_レ骸_レを_レ踏_レ付_レ刻_レ越_レて_レ除_レり_レ不_レ強_レく_レ門_レを_レ大
 軍_レ押_レ多_レ打_レ敵_レ六_レ既_レ不_レ上_レ下_レに_レ通_レり_レも_レ貫_レの本_レ折_レぎ_レ折_レる_レれ_レ後_レ
 士_レ大_レ手_レの_レ門_レを_レ開_レて_レ切_レて_レ出_レけ_レも_レ暖_レき_レ城_レ坂_レを_レ二_レ十_レ回_レ計_レ追_レ崩_レ火_レ花
 を_レ散_レて_レ戦_レは_レ三_レ大_レ將_レ夫_レ倉_レより_レ程_レ近_レく_レ見_レ下_レ居_レり_レとい_レ共_レ討_レ味
 方_レ入_レ令_レも_レ打_レ立_レ登_レる_レ松_レも_レを_レ龍_レ兵_レ坂_レ中_レに_レ於_レて_レ鎧_レ下_レの_レ高_レ名_レ士_レ討_レ
 死_レ味_レ方_レい_レま_レん_レ討_レも_レを_レ引_レ取_レれ_レと_レ敵_レ間_レと_レく_レ付_レ来_レる_レ味_レ方_レ鎧_レの_レ後_レ
 を_レ握_レり_レ二_レ十_レ回_レ其_レ程_レ敵_レ不_レ押_レ付_レを見_レぎ_レ後_レ志_レは_レり_レよ_レ不_レ登_レる_レ敵_レ味_レ方
 引_レ別_レも_レを_レ見_レて_レ三_レ將_レの_レ不_レ松_レ矢_レ倉_レより_レ横_レ矢_レ不_レ打_レ立_レな_レま_レ敵_レも_レま
 ら_レぎ_レして_レ引_レ取_レり_レ三_レ將_レ軍_レ士_レ不_レ向_レて_レ各_レ只_レ今_レの_レ了_レり_レ繪_レふ_レこと_レも_レ筆
 不_レ及_レ難_レ大明_レの大_レ軍_レも_レ定_レて_レ眼_レを_レ覚_レま_レす_レ遊_レ哉_レ遠_レ國_レ異_レ朝_レの_レ手

柄杓日本 殿下の衣服不備奉らんと城を奪りける十一
 人の高名実松平及清正の軍士北川藩右衛尉首一幸長の軍兵
 木俣彦三郎首一吉多一田中右衛尉九津見兵藏大河内辰
 右衛尉村十助林角左衛尉清井又右衛尉近藤甚右衛尉松原
 次郎右衛尉山川長兵衛尉九まで討取り城内の上下足を見
 清正肥後半國幸長の甲斐國の守護ふして首を宛ぬるよ
 一吉徳の小身あり九取事と徳勇士と持てりる物と
 讚嘆せぬを奪りけり然る三三の九城下に大敵の死骸敷を
 沙汰も田中大河内川村林近藤五人同くして一見ありて
 見え二の九の門脇小桶小杯を添高聲ふ水を賣大河内

寄見て何と問は其杯一盃の水を代銀十両と云大河内各り
 水飲之と云各代銀一と云大河内代銀某持りき何れも
 飲給と云一皆人盡飲り各先酒給某代銀一と云
 盃一と云一人跡不残り大河内一盃飲れ一と云水ありけ共
 金一と云一と通一と思て己は勿辨ふき奴も鷹の志尿
 を飲せり沙汰の限と云捨立ゆんと云水商人大河内各
 袖ふ五分大分の金ありと云下さきと云歎る大河内理て口金ハ
 持され共皆骨折る軍士も共り籠城武運開くまでハ
 某小敷置と云ありとも米ありともは在せり何程も充り下若
 落城下於ては汝金銀袋は持り共詮ふと色云厚せ

とも商人合點世辰是非とも下はまると云大河内多き已耳の穴も
 あらねらりさあふで金金んと云まらに遣あつちを見と商人の
 外不取捨ぎ二の丸一がけふはぎ入ぬ大河内夫より降なきは各水の以振
 巴糸一と一札を述べ系田中不審を立て頼小同大河内若て思ふる
 聞よりあは此法城小何重ゆりてきんぎ理り云ども聞さるああら
 突抜んとせしうは早くして二の丸逃入けりと語る役所小寄居
 る一吉幸長と家の子一及小多を打て大笑し我も人も見ふまど志
 代無きは是遊りと打過るあふさりとくは出りしと高笑の音
 を聞て一吉幸長より喧嘩しるはと使を立て其申小田中少
 も笑ひて草摺をいこと打拍も無念口惜き水を飲ふは拍我

此水某が各小興る糸の成を半分年ふも足さる大河内ふつ
 めもさる海死しと云ふ云ふ其顔洞がわききとて又大笑をぞ
 しりき三大将も是を聞て働ふる仕方小堀裏の用小立奴
 小遊ぎ尤也と笑ひりて清正幸長大河内と見る度毎小い大大河内
 後此頃小水高は仕給ふと云り大河内その事よ水商人小出逢
 小堀裏の働門の堅め第二段一先水高小五組申度り得共高
 人小逢りてと答るまは相商させ及事よと目くの勢もふ成ふ
 不夕言ふ成されば一吉幸長の軍士寄合夜討小出とと談極
 め大河内二の丸の清正小向く密小合言葉と云合せ五六十騎馳
 出と敵陣を打散し端く少く高名一太刀の玉葉敷皮以下を濫

ふして事放るく大手の門は入り

秀元其日討たれ刀の鐔法の本瓜小真渝の履輪とけりあ
鐔と上帯小はる居るは諸人は程寒くひるき小其鐔ハ
何の為ぞやと云秀元答て愚らり各大明八万騎の攻をう
け切て出類なき討た成方小門も運を用あ子孫も傳へん
と云らる各大小突て炒豆をけあるとも此城運を用あ
ら下捨給と云いと秀元をほりあざ死とてと答
て捨ざりける不思議の事死を免きて帰朝一尺一寸備前
法光の脇差ふり多て世伴造酒允秀連小傳り此法光
元来刀あて父善兵衛尉政綱東條の合戦小帯一兄足立善

部政定上回の敗軍小帯せ一刀あり其を秀元傳りて南
原の城小朝鮮人四人の股を切て落し又判官小とめを差
又尉山あて大明人を切り日本あても秀元手小あさる日
本人をも切るれは三國の人を討一名誉の刀あり

女音未明より大敵一手を替りて申の刻小至まで透回あて攻
ありるを去とも籠兵堅固小防戦一城の臺木より上敵の首を
あさる錢先より大を出一玉の汗を流一突崩れ其日小敵の衆又
叶いどく將軍判官あげ麾をゆり一巻をぐて引あたる籠兵
もあめ息をほきて休息をうける新小清宗小添歩行一商人
ハ本五升持出く高うに賣加藤与平治是を見て買一と聞

此れは商人判金十枚ふてと云ふ加藤其末も此時の龍城小
 争う金銀有べきや我大小七枚の黄金を以て仕立て候斗付
 あり是をも以て五升の米を買ひてと云商人大小の口腰の地小
 代難と云ふを近藤四郎重尉同く大の眼小角を立て碇と
 睨て怠けるる理非とも知ぬ少くは奴の口上は堀裏うせぬ
 ふてふかー大河内水をとるに例ありシヤ細首別落せと云候
 刀の柄小字とるを走よる如く加藤押とめ先陣給理あり大河
 内迄の水買まもる仕合の上下知ざらんをき小今又彼を切め大
 河内迄の仕方をと云ふふ似て一一只代を遣まてと候云々の
 商人の近後眼色小肝を潰しぬひりあき居り一則大

小清きて米を渡りたり加藤其末を五粒七粒で残さば傍輩の士
 小振舞たる三大將を先として上下を見聞し若年の翁形
 類少き士と感涙を流し一吉幸長の軍兵夜小入を待て又
 夜討せんと談し清正ふおのどく直談を清正よりけり各此
 中の飢渴小足も早弱るべし同く無用多すとあり各各玉系
 夫果は得き少く成共取取兵の惣小致を危くして例の送
 兵ども思のよに打まき玉薬弓矢少く戦ひてを帰る
 廿六日未明外がのさあり騒々しく人馬の足音響とんど人
 なる間ど月を曇り霧を深し闇夜小燈を失が如く敵の旗を
 討つ堀裏の剛士少く懈怠せ候兵仗をばき攻るを遅しと

待りてり案のどく不致に置一太竹の登り道二三太丸乃石垣掛一及小半乗より大太岡を揚々味方思まう多て待居れ少し驚い時をも合せ程の返り待まう敵弥乎呼んで堀乃代本手と掛る籠兵一及小立ゆを面や胃や胸の板着るを幸小突落し刃落ると然知小居の計よ王の本陣頻小早鐘責んま悲巻をぐて陣みく小引おける籠兵不審をち今日の攻を早く引おれぬ河の事やと云合し大責の其間小枯草と山の六とく二三の丸の中持け積上あより一吉足と見り田中お魚尉九津見兵藏大河内茂在魚尉を合て敵燒草を積垂し一夜小入る門長屋矢倉中持け必定燒崩るべき智略るる其方三

人二の丸行て清正小相談を若清正近この挨拶小於て三人密に珍も出焼捨し敵更と見え馳向は是を早めて取入は強て出ばと云ハ時ふより敵より所おるありと細くと細をるも三人畏る清正小達るも清正其もたあそ存ぞれそも小依る只今早を返四節左邊を云付て遣し今に焼立は是は是出て見物し給一と蒼王其内近藤火をほ希悉く焼失し取けふ三人更を見て清正の返吾と同立歸り又清正今夕も夜討小出由合言葉の品々云通し是は清正堅く制して是は是の弱き小敵早入ぬ事と云り三人答る仰のどくくは兵今晩計ハ出しと云合せゆり枯草焼くふ近藤は手柄乃一吉洋小申する角で城内食事飲水を絶て己小

五日ろりけきば上ノ飢渴小疲果て其人とも見一匹憔悴しるを
 不義の佞人有て三大將潜小中上愈き度いと一吉右將使を立
 て會合して是を聞彼者傍の人を退らる一と申けき一吉田中
 九津見大河内小向立去一由りけふあ人の畏る座を立及所一
 以大河内小何根此者不思議の思慮を廻まと思つりと思ひ
 詞を念く一吉右將中上角大軍小團を只今小討死仕冥土との
 小供中一其共小何事を隠し給ふきと荒らる小申けき彼
 者是罪ふくして去る城內已小米水なく皆をき内小饑死一
 三大將の小命ハ士卒小比き小比き上の小為小身の為速小城内を
 小出有る後結の勢を催給一幸小馬三丈得は是小百も

江を渡一向方地一西京宿を事ハいと安んずる一と誓中ける
 三大將眼を見合て未返答も無り一以大河内團や否や夫軍將飢
 渴を軍士と共小一給ふ事古りの道ぞう一而此此城と申を
 遠く日本の地を離れ大明の攻を交る命を惜一と思召候や有
 き日本と言共猶恥一況他國小おひてとや維命を助り給ふと
 何の面目有て人小まふ給ふ愈よむとバ士卒の身命小大將代
 給ふ共大將の小命に士卒を代給ふは代給ふ不義る小申條ハ涉
 耳小入給ふは孺子角の推慕を立退下とはは荒らる云
 けきバ三大將一同小大河内ゴ口上尤玉極せりと同せり一バ不
 義の佞人手を失ひ面を赤めて退去を大河内座を立て馬有り

依て加勢の倭人出奔して大音小舎人を大將達の守り出せ
と云ふ小腰の刀を引抜て一々首を刎りたる相城内の軍士時分
を計り夜討小舎敵度夜の夜討小舎を焼て平砂小舎皮を
き胃の上小霜を交眼を体へして殊絶小大繩を掛ら小矢を取
そ之鎗の槍首を握て慥小陣を固め居る所へ銃兵二子別を
押並んぐたふ吐と打るを散れ小戦て志のきを刺り鐔を破と
どども大國の軍法仕置に依て大崩味方付せま一々番小隣
陣曾て加勢ぎば故小勢の兵望のま小敵の一陣打敷味
方ま人も討を引れりて治るま小残を杖小突つて中を
降りける大河内何門を設おとして居りたるを毎日二度三度

切てあつた中も一度も人小先をせき増はりしは幸長の軍士
とも何卒して大河内分先小先とあふ小を勵けしは飢渴
の苦勞も志とたり勇士の志を鉄石より堅りけり目と目を
奮て討あり

廿七日早天より又大敵雲霞の如く攻上る籠兵救日登取の攻別
あれは何れも驚き突き一刹那防戦以塙裏堅固ありを
の刻汗小悲りく味方も息を止め系然り如小筑黄門
秀往公の家老山口玄蕃允をたて蔚山の築城難依小及の由
兵を小捨教き小涙を急ぎ加勢をへし但南城釜山海ハ
日本の運送自由第一の濠をば大明人蔚山の人教を合て音

城を攻むと云事有るは左有ん小控たる千若年ふく
 兼城の方便を知れ又野合の働ハ松子を見計て随分智略を
 廻して一汝と寺澤志摩ちる是小在り堅く城をとりと宣
 バ玄蕃允上將軍の少身して勿體なき事と制し奉りぬ共
 心取らぬくして廿六日釜山海を空馬あされ廿八日の其道を一
 日一夜小若今日辰の刻計小蔚山を所の丸山小備を立
 と等しく算和泉守加藤左馬介毛利を攻むると出はる今曉
 夜不終まで大敵の圍を乗破り蔚山小入りと仰あり三人種
 言上仕るハ廿五日以来其趣を色々と相控仕得共大敵の敵
 いづはバカ業も謀るる及難くい少し時節を以て遊ばく由

申上る相黒母衣の使番あ人居て山の上の隠れ籠城の三
 將をさぐる年の刻計小蔚山向の入海の岸一黒母衣の武者二騎来
 て扇を揚ぐ城を招く龍兵南方の塀の上小飛より何とやらん
 と問答を城内の三將并軍士共鳴を静めて上意の品と取れと
 大音上げてほりけふ飛驒も主計頭左京大夫面々の馬駿を後小
 立曹とぬき塀の立木小をとりけ其外兼兵共塀のまきひみ志
 志を掛り必と有ればあまハ大將軍の上意あり連日籠城の苦勞
 采水あくして堅固小城を防ぎ教度の武勇を奮起は感悦斜か
 らぬ城内いふも心強く思ふ何程の大軍を至とも即時
 切崩し急運を聞きて一と噂りり飛驒も大音を以て山上住

申上るふては定小有難き上意を承り百石筋の加勢よりも
 城内競ては沙汰然と云き根心披露にぞと答けまは上使の既小
 騎ゆりけふ城内の上下上意を因より大ふ力を得る一同小感
 一奉り流石に殿下の賢息と云き山器量あり當年十六歳小
 夫を成せ給ふ孫吳が肺肝より流出し給ふ尊将の四國九
 國の大小名五十六十及て其名久しく人小唱く大將我今有け
 子と此河及び十六の老翁六旬の少年と譽門毀つ笑け
 一吉が家中より領地の高と云人柄千人中も猪とる男も以の外
 腰拔て此彼と云く小屈居る奴系十人餘りも有しが將軍公
 の心河を現し聞て早龍城も開きと思はる氣色よてよろしく

と云くと出てさまよひひりり川村十餘大河内を在馬尉府
 て初大將の心河を臆病者の妙業と見たり廿二日の敗軍より目小
 も見れば不奴系が鐘よりびひあり可笑はる如何小已等又敵う及
 一左有る眼をどし立所よれまは一塙裏の役小立以早と矢倉
 仍耳の穴石と云くまはとやめと替まける彼十餘人の者共物をも云
 以頭をさげ給り口系一吉清正折しも通りたるを止めて是と
 聞て清正言たる人間の強弱を加むる替り物に河を走ら小ま
 給ふ知行の川よりと云くね能次多と思はるよや清正幸長
 小向く山をの土木侯彦三郎昼夜の振を見らよ比類あく見乃ハ
 美小つ川も運を聞申はる過分の加増し給ふ一又此河の家を

歴々として見ゆる男二人昨日の大攻の内小御共思ふまじ一縮を經
 捨て紅繪のうしろの紋有大夜着をうへ紫のうしろの紋をうへ眼小
 佛も多に体中をうへ居きありきりる伊達公も若くもバホーの
 多て彼奴系が家中の差引をうへ如小大なる腰抜り飢るひす
 死して不幸い若も存ある急小首を刎断つとぞ云りける
 廿八日大明人軍軍ま六蔚山小地と云小勢と云旁陣を廻まふ
 と雲小振り人馬腰兵糧づりして死出さるま小城はの外小固り
 一六敵も城と等と飢りり然も共数万騎の大軍後の小城
 一攻落さぎしてをめぐると引退を事大明の恥辱と思はれ古王
 計既小仕一固本城後者と云者去子細有て日本を出奔し年比

大明小住して今度蔚山小向ひ八千騎の大將少て来りたる彼を
 お人の王の大使として今日己の刻計小扱を令えたるを城内數日の
 勇力は振るは次第あり此六城を用渡して身命を助り日本大
 王(忠節)河まらりとあり城内より田中大河内九津見三人出で城後
 ち一互小名乗合々右の口上を固大河内使番るをバ行て三将(カ)一
 と田中九津見まらると大河内固本小向ていふ小城後夜ゆき日本
 の人ありしが柳や命が惜きとて敵小城を渡りて北退法や有
 き唐國へいざあ戻我朝小於て此例を固む其旨大將(申)あは
 己が身命助りては小法を此事と申とて急ぐま一定あり左の
 如くある臆病沙汰大將(申)とて覺悟不及は城内水兵糧少まら

玉葉の饒小ふまはる大軍を以て攻らもん小何程の事うり魚は只
 とくはるる一屍を蔚山に埋て義名を後葉換んと云る誠は
 ち其を聞きて足跡ふく本陣にゆりしが又乗来り三人を招き大
 河内に向き山道に歩み返るお王に申けまはりの外大に感
 ありの河深おまると後悔せり寒天と云ひ大軍小圍を水に渴
 一食も飢もあらず兵勇士の道と立く大將の耳ふたふ入ると
 事尤感むる小壇よりその人の名苗字を書田と云ふ即ち
 山道の山名を書り然ら大明日の王と城内三人の大將と互小
 勢中半途小出合會盟一其上異議あく互に互に飢渴の勞
 兵と息と一と有大河内其口上を三將披露を三將軍兵を百集

め面々の所存跡に中一と有るを異口同い申けは連も城の
 為新五日を出て悉く餓死せしむる有ん小於て日本諸勢の
 弱のみふあはるの城も力を失ひ朝鮮と一和の族もいふ免小
 角も城を責め落さむとて大敵を靡き此城内に極の傍
 利も一一人質を取替一堅約とて小對面小於は然る死事と
 詞をばまきて申けまはる三大將我もたしと思へと上下一同小決一三
 將より返答小軍人質を互替一對面以後兵儀る馬を合る
 小於はお王に小任を一とあり大河内其背誠後お言後を少
 一時と經て又越後お来り白人質の望尤も極小得共去る
 中の三大將の内一人とて一人此方一出城も有るお又大明大皇帝

の名代も此方王の内一人入城も難し然る以下の人質ハ
 其上大國小偽多きの條正月三日午の時小會盟と有るれ
 城より尤と返事して其款不極り使ハ既ハ論ぬ是より敵味方
 矢を止てなまども城内ハ少くも心をあはせしめて堀裏を堅
 ちりり然るに大河内膳當ハ止て脚絆をはき居るる脚絆の
 緒も解いて足首下りあり昨日も下りて行列上りて女結ハ
 置し小又りれれ夫少く心付膳肉落くおそと思ハ脚絆をばて
 見えハ只竹の筒をさるる如くよて膊の肉ハ少くもあくて骨に
 皮のうす計かり傍々小山川長多信尉と言者甚くし止し付
 小く常小頼骨あきて眼も大小口廣き男ちれど面を見せと

思ハ大河内山川少回ハ遠胃を脱く頼當とて面を見せ
 と云もハ山川谷て敵俄小責ハ胃を著る隙あるありきと云
 を無理小脱きて見えハ寔小何したと云て極もあき面神只繪小
 畫ハ餓鬼小異るる諸軍兵号を見り一同小多と打て高天
 又落涙もあり大河内云るる此式もて敵一人合多小まると
 成難くも我民神大菩薩を信し奉るる四足と堅く林ふるら
 此時の事あれは死す馬の股を切て矢の根小貫き討て
 一矢共と薪と焼て食ける諸人号を見ていふ大河内味れ
 やと同答て我味ハ構ハ力小く成ハ石共吞て唐人多人合
 手小ハ為るりと云もハ我も人も尤とて食ける復小四

五丈のふの足程を皆よしなるとも大勢の軍成り咽を濡は
移も無りけり

廿九日敵味方互小物静かり去共城内小昼夜眼を合せび堅め
る城内は彼の矢倉下道脇の目表小士足輕人夫等小限りぞ
飢渴の上の寒難小痛と五十人三十人後れ又其好も
まで頭を低し伏居けるを教を知り早二三日も身どきもせ
はまば城裏廻る軍士滄を白くくぞと旦一に哉日もこうら
さり一かべ鎧の石突を以て刎傷一見ま悲く居まらん小成或ら
小不用りれく死居るりり哀共言舌小迷難き龍城より角
て今敵責をゆるし休息の隙ありけま清正加藤与平次と

具一本九一吉の元来て大河内茂方島尉を迎付廿三日物搦大破
の別少色は頼ちき敵の二より矢倉より朗小一覽を大手の門の殿ハ
内邊掃子の門の殿与平治よりとより大河内忝き山廻と承り以好
共某小曾て殿小ていひ廿二日の大敗軍小馬殺す所射らま得歩
立の仕合ふる小依ておのけ遅く取入る小聊以て殿仕之きお存
手次らむ心家の与平治夜を心とある左末大更夜を先小互ま
其上馬踏小輪をうけ敵小打せ候して其の事は古今無双の名高
き殿あつたと又存まは清正大悦の氣色おて大に笑ひ以て道正直道と
る人ふ心掛あれ連も跡小退る者を殿と一言也連則其日の為人
を敵と目録小書載りり相城下を見まは城内敵より射る矢先

石垣小當り落積りし八間の石垣二間余を悉矢ふりたり
 奥國中押働の道筋も諸人大小濫妨は秀元も日本帰朝の
 土産と思て後錦金襴八系無後帳子色の巻物見撰る會
 して又明日能を見て八系小當りも秀元も焼捨る類
 少るは計をすぐり取三百七十巻あり諸人悉く取仕せり
 跡あて八系不藏も皆焼散して通る秀元母妙玄院土庫小
 と心ばしある印子の釋迦紺紙重泥の類るる能筆の法華經
 其外弓矢籠茶碗硯以下色と格との朝鮮道具を牛二と小
 付し蔚山の小屋まで送る持来りしに八系持来りし馬を踏
 殺しあるは小倉中坊に焼失を其のみありに大内殿下より

洋領せし山羽織黄金秀元重代備前兼光が脇差ふふと
 悉く炎上りありき
 一吉清正千三と云所お逗留の内お家の軍勢をいふを巻虎
 物せし虎あがりから向ふ居る吉清正軍士盛るお頭を食ひ
 ぐま小倉ぐまに腕をくひぬぐれて忽小死りけし大車比
 軍をあて所詮いらざる事とて虎物も止りけし朝鮮あて
 も虎りの功を殊小大男と定まり又小シキと云所お出で押る
 小二丁餘りの田切有る馬の太股を責るなどおれを泥をこめて乗
 渡り事成難しおれをさきと云知小近お小大きおる花あり打
 破見ま唐木棉を法めおり幸と云出し二丁余の深泥を木

柳をみて悉くうめて人馬を通しるをり人妻のまゝト馬の出
 ぶまでくる唐木棉を引裂衣他て用より押陣の内へ妻おまご
 不以鶴白鳥を初て多魚類の菓子小ぶまで日本よて只干
 菜を用より猶澤山腹しけり秀元幡宮を信仰し奉まば
 四豆を用ざるといども異國波沙の名譽の為小虎を腹しき
 金翅鳥をも食しける多事遊覧小大さふは事最艶やう
 亦所栖日本小ふとふき松より往りの道廣ハ三十五間二十
 五間より狭きふ一里の境國境小大石を以て八角よ切て大
 文字小銘を切付立てあり

朝鮮物語卷之中終

